

No.2508

清朝皇帝死去と新皇帝即位の報の伝達とその受容からみる清朝—チベット関係

筑波大学大学院人文社会科学研究所 博士課程

岩田啓介

本活動では、清朝檔案史料とチベット史料を駆使し、清朝皇帝の死去と新皇帝即位の報がいかにしてチベットに伝達され、それをチベット側がどのように受容したかを分析し、清朝—チベット関係の一側面を考察した。本研究を実施するに際し、既刊史料を調査するとともに、中国第一歴史檔案館（北京）と国立故宮博物院（台北）において未刊行の清朝檔案史料の調査を実施し、それらの調査結果に基づき、以下の内容を解明した。

皇帝や皇后の死去等、王朝の大事に際して、清朝は中華王朝的価値観に即して作成した詔を頒布したが、チベットに対しては、乾隆（1736-1795）年間初頭まで、頒布する詔を皇位継承に関するものに限定していた。また清朝は、頒布する詔をチベット語に翻訳した上で清朝の管理下のラマを通じて送付し、それを受けたダライ=ラマやパンチェン=ラマは、チベット仏教的儀礼を実施して対応した。そして、乾隆年間中葉以降に、清朝は皇后や皇太后の死に関する詔もチベットへ頒布するようになり、それが先例となり、皇后や皇太后に関する詔の頒布が清末まで定着した。ただし、詔の頒布と受容の両面において、清朝—チベット間ではチベット仏教に基づく対応が継続し、清朝・チベットの双方で「先例」を参照して、それに基づく議論の後に詔が頒布されていた。

かかる対応は、原則として全ての詔が頒布された漢地への対応とは異なり、更にチベットと同様に清朝の藩部に位置付けられた他の勢力への対応とも異なるものであった。このように、施主—応供関係としての側面が、詔の頒布という中華王朝的な儀礼においても影響を及ぼしていたのである。ただし、制度上の規定が存在しないにもかかわらず、中華王朝的価値観に即した詔が頒布されていた事実にも留意すべきであり、清朝—チベット関係がチベット仏教的な構造、或は中華王朝的な構造のいずれにも収斂できないものだったのである。